

日本イギリス哲学会 第44回 関西部会例会

日 時：2011年 7月 2日（土）13:00～17:40

場 所：キャンパスプラザ京都 京都大学サテライト講習室（6階・第8講習室）

交通アクセスは裏面の図でご確認ください。

報 告 1：13:00～14:25（討論を含む）

報 告 者：矢口 裕一（名古屋大学大学院 文学研究科博士前期課程）

題 目：道徳の結合説—道徳の認知主義 VS 非認知主義—

報 告 2：14:40～16:05（討論を含む）

報 告 者：中野 安章（トリニティカレッジ・ダブリン博士課程）

題 目：バークリーと「自然法則」の知識

報 告 3：16:15～17:40（討論を含む）

報 告 者：川名 雄一郎（京都大学 次世代研究者育成センター）

題 目：19世紀前半のブリテンにおける性格の科学の展開

なお、各研究報告の要旨は、3-4 ページをご覧ください。

例会の後、簡単な懇親会を予定しております。こちらにもどうぞお気軽にご参加ください。

また、本年12月の部会報告をご希望の方は、以下の担当者あるいは事務局までお申し出ください。

関西部会担当

久米 暁（関西学院大学、[exkume\[at\]kwansei.ac.jp](mailto:exkume@kwansei.ac.jp)）

竹澤 祐丈（京都大学、[Takezawa\[at\]econ.kyoto-u.ac.jp](mailto:Takezawa@econ.kyoto-u.ac.jp)）

※[at]を@に置き換え下さい。

<会場案内>

キャンパスプラザ京都 京都大学サテライト講習室（6階・第8講習室）

〒600-8216 京都市下京区西洞院通塩小路下る

（ビックカメラ前、JR 京都駅ビル駐車場西側）

TEL 075-353-9111



＜日本イギリス哲学会 第44回関西西部会例会 報告要旨＞

報告 1：道德の結合説—道德の認知主義 VS 非認知主義—

矢口 裕一

1950年代、イギリスでは道德を信念であるとする認知主義と、欲求であるとする非認知主義という立場の対立が見られた。道德の認知主義とは道德的な文は真偽の評価ができるという立場を言い、道德の非認知主義とは道德的な文は真偽の評価ができないという立場を言う。しかし、両立場はそれぞれ道德の一側面を捉えているにとどまる。まず、認知主義は道德の存在を当然に認めすぎているし、事実分析と規範分析がないまぜになった価値内在的な理論である。他方、非認知主義は道德の存在をあまりに否定的に捉えているし、道德を折り合いのつかない外在的な価値と捉えすぎている。現実を説明するためには、道德は欲求と信念の結合体であるという前提に立ち、政策的含意を示すことのできる価値中立的な規範理論が必要だ。

(名古屋大学大学院 文学研究科博士前期課程)

報告 2：バークリーと「自然法則」の知識

中野 安章

バークリーの自然概念は、「非物質論」の帰結としてのその徹底した非-実体化によって、つまり自然における物体の独立存在と因果性の否認によって、特徴付けられる。しかし、これは単純に自然が「観念」の集積へと還元されたということではない。バークリーにとって、観念の継起に恒常的な秩序を与える「自然法則」の存在は基本的事実であり、この法則性こそ実在を想像から分かち基準であるとされる。だが、この自然法則は自然のうちにどのような仕方で存在しており、またそれはどのように認識されるのであろうか。本発表では、バークリーが日常的レベルと科学的探究のレベルで自然法則の知識をどのように捉えているかを検討しながら、この問題に次のような解答を試みてみたい。バークリーにとって、自然法則の存在は精神の認識する働きと相即不離であり、それは神と人間の精神とのいわば「協働」のうちに成立する。そして、この「協働」における人間の側での本質的契機は、日常的レベルでは自己保存への関心であり、科学的探究のレベルでは記号の創造的使用を媒介とした、自然の類比の包括的理解への努力である。

(トリニティカレッジ・ダブリン 博士課程)

(次のページに続く)

報 告 3 : 19 世紀前半のブリテンにおける性格の科学の展開

川名 雄一郎

本報告では、19 世紀前半のブリテンにおける「性格の科学」の展開を検討する。最初に検討する骨相学は、人間の性格と頭蓋の形態の関係に着目することによって人間の本性や性格を研究する生理学理論であり（生理学的決定論）、1790 年代にウィーンの医師 F・J・ガルによって発展させられ、19 世紀前半のブリテンにおいて一世を風靡した。次に検討するオーエン主義の特徴はその環境決定論にあり、この理論は人間の性格はもっぱら彼を取り巻いている環境によって形成されたものであると主張していた。最後に検討するエソロジーは J・S・ミル（および A・ベイン）によって提示された構想であったが、それは骨相学およびオーエン主義の「誤った決定論」に対する批判の試みであった。本報告の目的は、これらの科学の間の対抗関係を念頭に置きながら、「性格の科学」をめぐる 19 世紀前半のブリテンの歴史的文脈を描き出すことである。

（京都大学 次世代研究者育成センター）